

間文化現象学研究センター 記念会議講演へのコメント

Remarks on the lectures for the commemorative conference of the
Research Center for Intercultural Phenomenology

谷 徹*

ナミン・リーの講演について

最初に、ナミン・リーの講演に深くお礼申し上げます¹⁾。

この講演は、フッサールの超越論的主観性とハイデガーの現存在との関係に関わるものでした。この問題を考えるとき、私は三人の師を思い出さずにはられません。新田義弘先生、曹街京 (Kah Kyung Cho) 先生、クラウス・ヘルト (Klaus Held) 先生です。この三人は、いずれもフッサールとハイデガーの関係を深く考察した人々です。そして、テキスト解釈はもちろんですが、先入観を排して事象そのものへ向かい、それを分析し、それを言語化するという哲学的態度を重視していました。より具体的には、三人は、それぞれ、生 (Leben) と差異化 (Differenzierung)、自然存在 (Natursein) と意識存在 (Bewußtsein)、現出する世界 (die erscheinende Welt) に向かったと言えるでしょう²⁾。そして、この三人はみな間文化性の問題に深く関わっています。さらにまた、この三人との関係については、ナミンと私はほぼ重なっています。師と教え子は世代的関係をもちます。

今回の講演は一見すると間文化現象学の問題に触れていないようですが、しかし、それが問うところの間文化性は同時に問世代性でもあり、三人の師の開かれた言語を媒体とすることで (それを歴史的に継承・展開することで)

* 立命館大学文学部特任教授

ナミンの講演は間文化性に関わっています。

このことを土台にして、ナミンの講演に対して、私としては、疑問的というよりも補足的な解釈を述べたいと思います。

ナミンは、フッサールの超越論的主観性とハイデガーの現存在を、第一に世界との関係から、第二に気分ないし感情との関係から、第三に志向性および *Sorge* (これは今回の邦訳では「関心」と訳されていますが「気遣い」という訳もあります) との関係から解明しました。

第一の観点についてはヘルト先生が重要ですが、オイゲン・フィンクそしてゲオルク・シュテンガーの議論も思い出されます。私自身は、世界を、すべての構成に先立つ原単数性 (Ursingularität)、構成における単数/複数性 (Singularität/Pluralität)、構成がそこへと向かう超単数性 (Übersingularität)、そして、さらにこれらのあいだで起こる運動において捉えています³⁾。構成に先立つ世界は、対象 (これは「…である」と規定される) の構成の可能性の条件として、本来それ自体では対象のように「…である」として規定されず、またそのことからしてたいい見落とされているわけですが、それでも、この運動のなかで (「私」による諸対象の応答的構成がそこに沈澱するという仕方で、明示的でないままに) 構成されており、その世界が異他的な世界 (*fremde Welt*; alien or foreign world) に会うことで、複数の世界あるいは複数の文化的世界が成立し、そしてそのときにこそ、この世界が他の世界との差異のなかで、いわば対象になぞらえる非本来的な仕方で「…である⁴⁾」として一定程度明示的に規定されうるのですが、しかし、そのように「…である」の規定が成立するときにはすでに、それらの世界 (異他世界と故郷世界) は超単数的な (あらたに見落とされる) 世界のなかに位置づけられています。この運動のなかでは「ある」の規定に関して、原単数性へ完全に還帰することも超単数性へ完全に到達することも起きず、むしろ、そうした両端の「あいだ」で、言い換えれば「出会い」の「あいだ」で、(前進的および後退的・再帰的な) 構成運動がつづくということが重要です。世界の「…で

ある」の規定は固定されず、つねに運動的です。歴史あるいは文化形成はこの構造のなかでこそ、遂行されるでしょう。第二の観点については、私自身は、日本の哲学者、坂部恵先生の「うつし」という概念からさらに展開できると考えています⁵⁾。「うつし」は、とりわけ気分や感情において端的にその機能を発揮するからです。気分や感情において、世界と主観ないし現存在は相互に相互を「うつし」出します。これも志向性の働き方のひとつでしょう。ただ、ここでは、世界と主観ないし現存在とが最も緊密な近さのうちにあるときにその「あいだ」で生じる気分や感情の「うつし」に対して、それらとは異なる他なるものとの「あいだ」では遠さにおける「うつし」——気分や感情としては、おそらく非本来的な (uneigentlich) な意味ではあるが、しかしきわめて強い意味での「不気味さ」(Unheimlichkeit) の「うつし」——が生じうるだろうということを指摘しておきたいと思います⁶⁾。そして、第三の観点に関連して、ナミンがフッサールの現象学的・超越論的還元とハイデガーの現存在との関係についてなお研究が必要だということを述べていました。このコメントでは、この第三の観点・論点について述べたいと思います。

超越論的主観性の志向性も、現存在の *Sorge* の運動構造も、これに関わります。一見すると、志向性は対象に一直線に向かいます。また、それは、ナミンが示したように、世界に対しては一直線というより地平的に向かいます。しかし、世界は、対象の構成を可能にする前提的な場でもあり、対象は世界からまさに対象として現出してきます。その意味では、対象よりも、世界あるいは世界現出のほうが根源的です。超越論的主観性はまずもって世界と関わって、あるいは世界現出に応答して、対象を構成する、と言えるでしょう。

他方、現存在の *Sorge* は、ナミンの講演では語られませんでした。現存在の非本来性から本来性へ、あるいは非固有性から固有性へ、という一種の再帰運動をもっています。この再帰運動は、志向性の直線運動とは異なるよ

うにも見えるでしょう。しかしながら、現象学的・超越論的還元はまさに「還元」であって、根源的なものに引き戻すことです。この引き戻しは、それ自体、再帰運動でもあります。

私としては、この再帰運動それ自体は、根源的なものから派生的なものへの発生をそのまま逆行するのではなく、つねにそこに差異を発生させつつ逆行すると考えています。このことが、たいてい見落とされている「時間」をはじめとして現出させ、かつまた、このことが、(異他的な世界との出会いと相まって)「現象学する」という作用それ自体を自己閉鎖させず、むしろそのつど外部に開きもすると考えています。このことはまた、言語——これはまた、自閉的でない主観ないし現存在にとって、他者から由来する言語であり、また他者に向かう言語ですが——を媒介にした間世代性をも開くと考えています。この再帰は現象学の運動ですが、しかし、この開く仕方であらわれる再帰運動を、いわばその外部から眺める超越的な主体の作用として見るのは不適切であり、むしろ、その再帰運動それ自体が志向性ないし *Sorge* の運動だと見るのが適切でしょう。

この点から見れば、この運動が最も端的に示されるのが、間文化性においてであるように思われます。間文化現象学は、世界に開かれるとともに諸文化に開かれながら、自己に再帰し、しかも、そこで生じうる自閉性を打破することで、自己を開くようにして展開する運動であると思われます。だからこそ三人の師もこの問題に深く関わり、かつまたナミンの研究と講演もそれを間代的に——すなわち研究上の間代的性において——継承・発展させているのだと思います。

以上、ナミンの講演に対する私の補足的なコメントです。

ミヒャエル・シュタウディグルの講演について

長年にわたって「暴力」を深く鋭く研究しているミヒャエル・シュタウ

ディグルの今回の講演は、「暴力」を「宗教」との関係で考察しています。すなわち、宗教に（内在するとまでは言えないとしても）関連する暴力に、とりわけシュッツなどの現象学的な社会学の知見などを取り込みつつ、光を当てています。その講演に感謝いたします。

シュッツの *relevance* の概念は、なにかが背景から浮かび上がってくるという意味で、重要だといった語義において使われることが多いでしょう。この浮かび上がりが、物理現象ではない、ひとつの〈意味的なもの〉の構成、さらには、ひとつの意味的な世界の構成を可能にしますが、しかし、それは他の意味的世界の構成も可能にします。ただし、今回の講演で重視されているのは、そのように浮かび上がってくる意味的なものが、逆に、それがそこから生じるところの生活世界を変形させるという、いわば逆方向の動向です。その際、ひとつの限定的な意味的なものである「宗教」——これは聖なるものや超越的なもののある種のコミュニケーションを含むと考えられています——がまさにこの運動をきわめて強く押し進めるところが、最も重要であるように思われます。

ところで、宗教には、ヘーゲルが示したように、*re-ligio*——この場合には、分断された事象と事象、人と人を「ふたたび結びつける」——という側面があると考えられてきました。たとえば、聖霊降臨によってキリスト教団が成立する場合などがそうでしょう。この教団のなかでは平和も可能かもしれません。これは、講演では「平和の船」の役割に当たるでしょうか。これに対して、講演では、そうした宗教が（人と人を分断する力を含む）暴力とどう結びつくのか、あるいは両者は、必然的ではないならば、どんな仕方で結びつくのか、といった問題が深く考察されています。

おそらく、そもそも、分断されたもの同士を結びつけるということ自体が一方で暴力の禁止の側面をもつとともに、他方でその特定の結びつけそれ自体が別の分断を呼び起こすという暴力の遂行の側面とをもっているのですが、講演では、とりわけ宗教的な「超越」や「聖なるもの」の成立

(浮かび上がり)が重視され、そしてそれが社会全体に再帰的・回帰的・再活性化に関係して、社会に(ある意味で認識論的な information ではなく)「変形」(transformation)をもたらすということが重視されています。いや、翻って、いわゆる「理性」さえも宗教をおのれにとっての「超越」(あるいは他者)として利用して成立し、そうした理性が社会全体に回帰してそれを変形させてきたという面をもつでしょう。

宗教に話を戻すと、宗教は、生活世界を変形させるだけでなく、それ自体の内部でも、異端などを生み出すことによって、自己に対しても同様のことをおこなっているのでしょうか。このようにいくつかの異本はあるでしょうが、それらをつらぬいてこの回帰的な変形という観点が講演で重要だったと思われる。

さて、このことから、「宗教は、現実を変形させ、それを意味に富んだ仕方

方で秩序化するための手段として考えられてきたのだ。ホップズがとりわけ明確に示したように (cf. Liebsch 2015)、暴力が常に社会秩序の構築、確保、または再確立のあらゆる試みのかなめであることを認めるのであれば、われわれは、暴力が、宗教的知識の諸体系やそれらを伴う意味生産的あるいは文化的実践のうちに、還元不可能な仕方

方で織り込まれるのはいかにしてか、ということ

を考慮する必要がある。」と述べられます。この後の箇所では、宗教が身体性をもつこと、そのなかで「自分に対する鞭打ち」のような、一見して暴力的な行為などにも言及されていますが、しかし、現実を変形させることは総じて暴力的だと言えるのでしょうか。それとも、変形それ自体は一般的なことだが、しかし、とりわけ聖なるもの、超越的なものによって、事実がねじ曲げられて、「事実
に反する保全」が働くようにしてしまうことが暴力的なのでしょうか。この反事実性という点に注目すれば、マルクスが宗教は「アヘン」だと述べたこと、それはまた、ごまかしでもあれば、一種の救済を与えるものでもあるといったニュアンスをもつわけですが、ここでは、宗教がそうした「イデオ・ロギー」すなわち「観念(アイデア)の言葉

(ロゴス)」で終わらず、むしろ「現実的生活の言葉」となってしまうというところに講演の議論の重点が置かれているのでしょうか。しかし、さらに、そうした現実への回帰的変形が起きても、それは暴力的でないという可能性はないのでしょうか。たとえばプラセボが病気を治癒させる、すなわち患者を「病人であらぬ」としてしまおうという場合も暴力的でしょうか。もっと大きなレベルでは、日本は遣隋使、遣唐使から現代まで、それまで「未知」であった中国や西洋の「イデオ・ロギー」を留学によって学び、それによって日本の生活世界を変形させ、もはや（ある意味で）「日本的であらぬ」ようにしてきたわけですが、それも暴力的でしょうか。あるいは一定程度暴力的でしょうか⁷⁾。

おそらく、そもそも社会的世界の意味的構成は、単に事実としての「ある」を構成するということだけに終わらず、事実以上／以外のものさえも「ある」として構成してしまうように思われます⁸⁾。このかぎりでは構成は過剰です。過剰性は哲学が求める「真理」とは相性がよくありません——いや、じつは「真理」こそが過剰なのかもしれませんが、この問題はさしあたり脇に置きましょう。今回の講演では、もろもろの宗教的過剰性を——その仕組みそれ自体を「知る」ことによって——いわば相対化する見方が暗示されているようにも読めます。しかし、それにしても、もしプラセボ的な過剰性が暴力ではないとすれば、他方もし宗教の過剰性が暴力と結びつきうるとすれば、その相違はどこにあるのでしょうか。宗教が暴力と必然的でない仕方、偶然的な仕方と結びつくことは理解できるのですが、しかし、この点をもう少し説明してもらえるとありがたいと思います。その場合には、超越あるいは聖なるものが決定的な役割を果たすのでしょうか。

今、戦争の暴力がつづいています。この暴力に宗教はあまり関わっておらず、むしろ、ひとつの政府の内部での、ひとつの国の内部での information の過剰な制限が関わっていて、それがまさにその外部への極端な transformation をもたらしているかもしれません。では、「われわれ」の

informationはどうでしょうか。この点について、「真理」の知を求める「哲学」はどう考えるべきか⁹⁾、ヒントをもらえれば、と思います。

ゲオルク・シュテンガーの講演について

この講演では、『間文化性の哲学』(*Philosophie der Interkulturalität*)の著者であるとともに間文化哲学学会(Gesellschaft für interkulturelle Philosophie)の先の会長でもあったゲオルク・シュテンガーが間文化哲学あるいは間文化現象学の広範な諸問題をいわば一望のもとに捉えて見せてくれています。間文化現象学のこれまでの展開がまとめられているだけでなく、(間世代的な)「将来」への展望も示されています。間文化現象学は、まさに現象学が依拠するところの「われわれ」の「経験」あるいは「生」の動詞的な運動のなかで、そしてそれに促されて自己展開していきます。

現在のわれわれの経験あるいは生がいくつかの大きな危機に出会っているとすれば、間文化現象学はそれへの応答に向かわざるをえません。そのとき、知を愛求する哲学でもある現象学は、間文化的な生とそれについての／のなかでの知が、従来のそれらとはどのように異なるかを示しつつ、新たな「応答」を示さねばなりません。この意味でゲオルクの講演はきわめて示唆的です。

講演では多くの問題が扱われています。ごく大雑把に見ても、普遍主義と相対主義などの対立に対する「あいだ」の問題、また、地平的＝水平的思考と垂直的思考とに対する「あいだ」の問題、これは西洋的思考と東アジアのあるいは日本的思考と関連づけられています。そしてまた、そこにおける「媒体的」現象学にも目が向けられています。

美学あるいは芸術における東アジア的なものが見事に示されていますし、また言語と概念についても同様です。主語と述語の関係も目を引きますが、とりわけ、この講演の主題に関わる「あいだ」の概念が重要です。中国哲学

あるいは倫理学の特徴も示されています。そして、植民地主義以後の間文化的思考の可能性が、デリダを引きつつ示されています。

*

こうした多くの問題が講演で示されましたが、このコメントでは「あいだ」の概念について少し補足的に述べたいと思います。「あいだ」は、ハイデガーにも見られますし、ヴァルデンフェルスさんも重視しています。しかし、やはり木村敏先生の概念が重要でしょう¹⁰⁾。また「あいだ」は上田閑照先生も使っています。少し戻ると、和辻哲郎の「あいだがら」もそのひとつの要石です。こうした「あいだ」と大きく重なる概念として、坂部恵先生の「あわい」を忘れることはできません。「あいだ」や「あわい」は、「実体」——これは多くの場合、名詞に対応しますが——に対する別の次元を開いています。まず実体がいくつかあって、その後で、それらが関係するのではなく、むしろ、「あいだ」こそが先行し、場合によってそれぞれの実体を可能にするのです。しかしまた、「あいだ」は、名詞と名詞の関係を示すだけでなく、動詞と名詞の関係も示します。たとえば、「生きる」という動詞と「生き物」との関係です。この方向で木村先生の「あいだ」は展開しています。このように日本語の「あいだ」が動詞とも関わるのは、それが日本語の動詞の「あう」に由来しているからでしょう。ちなみに、西洋語の対応する語("Zwischen"や"between")は「二」に由来しますし、中国語ないし漢字の「間」は(字形が示すように「開閉」する)「門」と関係しています。

さて、動詞との関係は木村先生の「あいだ」においても活かされていますが、しかし、語としては、坂部先生の「あわい」においてよりよく示されているようにも思われます¹¹⁾。「あう」の名詞化は「あい」でしょうが、「あわい」には、(ひょっとすると「淡い」との連想が関連するかもしれませんが)堅固さのない、一種のはかなさのようなもの、すなわち非実体的な、それゆえ非名詞的な性格、ある意味で揺らぐような運動性格がより強く感じられます。

こうしたことからさらに進めて、私としては、動詞としての「あう」をさらに強調したいと考えています。この動詞としての「あう」は、「適合」(合う)を指すこともできます。しかし、たとえば「であう」(出会う)という意味での「あう」は、家のような内部からその外部へ「出る」運動を示します。この「出る」ことと結びつく「あう」(であう)は、その意味で「越境」に、そして「遭遇」に関わることができます。

外部で「であう」ものは、家の内部に属さないものです。しかし、それと「であう」ときには、そこにあらたな「あいだ」が成立します。知らぬ間(あいだ?)に、すなわちその出会われるものについての知が成立する以前に、まずもって「あいだ」が成立してしまうと言うべきでしょう。しかも、このことは一度かぎりではなく、何度でも起こります。われわれの経験あるいは生は、そのような外部性と「であう」ということを何度も繰り返しながら、「あいだ」を形成するのですが、その反復のたびごとに「あらたな」あいだを形成していくと言えるでしょう——ちなみに日本語の「あらたな」は「ある」の派生語です——。「あいだ」あるいは「あう」は、こうした「ある」と関係する運動のなかでこそ機能する概念だと考えています。これがなければ、出会われるものについての知——この知は、その「…である」に関わります——も理解もまったく成立しないでしょう。たがいに知り合うことも、「あいだ」で可能になります。

これはまた間文化性の原理でもある、と私は見ています。あるいは、外部性と「であう」、そして、外部性に「なれる」(慣れる)ための原理でもある、と思います。外部性とであい、外部性になれるときにこそ、自己ははじめて自己に「なれる」(成れる)とも考えています。これはある種の豊かさを示します。このような運動は、ゲオルクという言葉では、Konkreativität(共創造性)に該当するでしょう。ここでも二つの語が「あう」わけです。しかし、いつもそのように「なれる」とはかぎりません。むしろ、その反対が起こることもありうると思います。それを私は Kontrakreativität として捉えること

ができると思います。

この Kontrakreativität は、外部性との「であい」の場合に生じますが、しかし、内部性においても、それまで「なれて」（慣れて・成れて→狎れて）いたものが、あるときから「なれない」（慣れない・成れない）ものになってしまうという場合にも生じるでしょう。こうした「危険」あるいは「危機」が経験あるいは生には潜んでいます（そもそも、内的なものの自己知・自己理解・自覚は、外的なものの知・理解・知覚と不可分ですから）。そして、それが端的にあらわれるのが、間文化的な経験あるいは生においてだと言えるでしょう。内部においても、外部においても、です。

しかし、危険であっても、われわれは、外部のものに「であって」、われわれ自身「であって」くる方向に進まざるをえないでしょう。そもそも、われわれが現在のわれわれであってきたのは、外部のものにであったおかげであり、われわれはわれわれであるためにいつもであいを必要とします。われわれは、外部のものにであってこそ、われわれ自身であってることができます。われわれだけでなく、外部のものも必要であり、すなわち「二」が必要です。そして、そのような「であい」のために家の「門」を「開く」こと（あるいは「間」を「開く」こと）が重要になります。それはまた、時間的には、将来に向かうということでもあります。この動詞的な経験あるいは生の運動のなかでこそ、現象学は動詞的に機能します。ゲオルクの講演はこの方向を切り開くものであったと思います。心から感謝したいと思います。いや、三名の講演者、ナミン・リー、ミヒャエル・シュタウディグル、そして、ゲオルク・シュテンガー全員に「あらためて」感謝したいと思います。彼らとの本日のであいは、われわれがわれわれ自身であってくるための可能性の条件です。

しかしまた、そうであるからこそ、現在の極端に巨大な危機がわれわれの経験と生とを覆っていることを、われわれは（このような、そして、これら以外の）「ことば」によって確認すべきでしょう。われわれは、安全な高

みから経験と生を見おろすことはできません。しかしまた、少なくとも現時点ではわれわれ——この会議の参加者——が敵・味方に分かれて戦闘行為をおこなっているわけでもありません。むしろ、この両極端の「あいだ」で生きています。安全な高みにおいても、戦闘中においても、ことばは不適切です。むしろ、両者の「あいだ」においてこそ哲学は応答的あるいは応答責任的 (responsible) に機能すると思います。その応答する「ことば」が「ことあう」(こたう=応う・答う=応答する) ことばとしてあらわれるはずだとすれば、——いや、こうしたことばが当事者においてあらわれないことがあるからこそこれが必要だと思われるわけですが——それが適切にあらわれるのは、なによりも動詞的な運動としての現象学においてでしょう。それを、「あいだ」のそれぞれの距離においてあらわれさせたいと思います。

このことはおそらく三名の講演者の「あいだ」でも共有されるでしょうし、またこのシンポジウム参加者のみなさんとの「あいだ」でも共有されると思います。それを聞きたいと思います。それが、間文化現象学研究センターのさらなる発展につながるでしょう。

私からのコメントは以上です。

注

- 1) 講演者にはファースト・ネームを使わせていただく。
- 2) これらの特徴を示す書籍を示せば、新田義弘『世界と生命』青土社、二〇〇一年、曹街京 (チョウ・カー・キョング)『意識と自然』法政大学出版局、志水紀代子/山本博史監訳、法政大学出版局、一九九四年、*Phänomenologie der Natur*, hrsg. von Kah Kyung Cho & Young-Ho Lee, Verlag Karl Alber (Freiburg / München), 1999, *Die erscheinende Welt—Festschrift für Klaus Held*, hrsg. von Heinrich Hüni & Peter Trawny, Duncker & Humblot (Berlin) 2002 である。
- 3) これらの概念については、拙稿 "Heimat und das Fremde" in *Husserl Studies* 9, pp.199-216, Kluwer Academic Publishers, 1993 を参照いただきたい。
- 4) 故郷世界は最初から故郷世界であるのではなく、むしろ、異他世界との対比のなかではじめて故郷世界である。その対比が生じる以前の故郷世界は、むしろ端的に世界である。

- 5) 「うつし」については、“*Utsushi, Shirushi and Mediation – the philosophy of Sakabe Megumi –*”, SPEP 52 (52nd Meeting of the Society for Phenomenology and Existential Philosophy), Hilton Eugene and Conference Center Eugene, 二〇一三年で述べたことがある。
- 6) この不気味さについては、拙著『意識の自然』（勁草書房、一九九八年）六三二頁以下でも少し述べたことがある。この概念は、Heim, Heimat, home（家、家郷、故郷など）の否定でもある。もともとそれに属していたがそれから外に出てしまったものも不気味であるが、しかし、そもそもそれに属さないものと出会ったとき、こうしたものはラディカルに不気味であろう。
- 7) 知られているところではあるが、vis（力）に由来する violence（暴力）と、walten（支配する）に由来する Gewalt（暴力）では、概念の射程が異なるだろう。漢字の「暴力」についても同様である。では、すべての暴力に共通する概念の決定は——必要ではあるだろうが——可能だろうか。だが、狭すぎる概念は暴力を取り逃がすし、広すぎる概念はすべてを暴力にしてしまう。暴力概念の「設定」それ自体も問われるべきである。暴力は、そうした概念設定を逃れるもの（そこから隠れるもの）なのかもしれない。
この講演では宗教に関連して暴力の社会性が問われている。しかし、社会性（宗教もその一部であろう）すなわち複数の人間の「ともにある」ことそれ自体がなんらかの暴力を内包しているとすれば、「ともにある」ことそれ自体が問われるべきであろう。「ともにある」とはどういったことであろうか。
なお、『暴力と人間存在』（筑摩書房、二〇〇八年）所収の拙稿「暴力論の基礎考察」を参照いただきたい。
- 8) いや、構成は、知覚的構成であっても、すでに過剰である。だが、重要なのは、いっさいの過剰性なしに認識する（構成する）ことではなく——これはある意味で不可能である——、そのような構成がまさに「構成である」ということそれ自体も含めて、認識すること、しかも、認識の内部で（すなわち認識の外部に出ることなく）そのように認識すること、であるように思われる。これは、間文化性にとってもいわば原理である。
- 9) 純粹に informative でも、純粹に transformative でもなく、むしろ、両者の「あいだ」で遂行されるいわば inter-formationこそが哲学的に重要なものかもしれない。「真理」も、「あいだ」（間）における「まこと」（真こと・間こと）に展開されるかもしれない。これはいささか複雑な概念になるだろう。
- 10) この「あいだ」については、拙稿「*«Klinische Philosophie» und das Zwischen*”, in *psychologik 1, Praxis und Methode, Positionen*”, pp.304-316, Verlag Karl Alber, 2006 を参照いただきたい。
- 11) 「あわい」については、“*Awai – the Japanese concept of betweenness*”, “The Workshop of “Phenomenology and Oriental Philosophy””, The Institute of Phenomenology of Sun

Yat-sen University, Guangzhou, China, 二〇一五年で述べたことがある。